

“心”をつむぐ

『鳥栖のつむぎ—もうひとつの震災ユートピア』編：関礼子・廣本由香(2014年 新泉社)

米川なつみ

本書は、東日本大震災を機に佐賀県鳥栖市に避難することとなったお母さんたちによる6つの手記集である。正直なところ初めはなかなかペンが進まなかったというお母さん、震災を経て全部が元通りではないけれど、元通りにする必要もないというお母さん、震災から3日後に出産したお母さん…。ここで綴られたものはすべてが世間一般でいう「被災地」の話ではない。そもそも被害の大きかった地域のみを「被災地」と決めつけるのは、支援など様々な面で境界線を引くことになってしまう。鳥栖に来た人の中には、福島から離れた「ホットスポット」と呼ばれる、放射線量の高い特定の地域から避難を選択した人もいれば、同じ福島でも地域によって被害が異なる人もいる。このような複雑な背景には、地震・津波をはじめとする自然災害と共に、人災とも言える原発事故が起こったことが挙げられるだろう。津波の恐ろしさを目の当たりにしたのも束の間、錯綜する放射能の情報に戸惑い、これからの生活に不信感を抱いた人は多くいたはずだ。そうした中で、鳥栖は避難してきた人を温かく包み込む受け皿となり、多くの人々を繋ぎ、支えた。

地震、津波、原発事故。今まで何度も聞いてきたはずの単語だが、私たちは実際に何を知っているのか。テレビ番組などを通して目にしてきた「3.11」は、編集され作り上げられた「3.11」の一部でしかないのかもしれない。その中で拾われず埋もれてきた「声なき声」を本書から垣間見ることができる。そのような「声」は、“心”で聞こうとしなければ聞くことができない存在と言えるだろう。そして、現在、海岸沿いに津波を防ぐ大きな壁がそびえ立ち、放射性廃棄物が行き場をなくしている。このような目に見える変化だけを知り、理解したつもりになっていないだろうか。本質はもっと別なところ、人々の心の奥に在るように思える。

人は人生の様々な場면을“心”で“感じ取る”ことができる存在だろう。“感”の部首は「心(したごころ)」だ。“感”という空間には“心”が含まれているのである。古来、日本には文字文化が存在し、それらを用いながら、書く文化・読む文化も発展してきた。本を支える個々の文字は、「つむぐ」ことで初めて大きな世界を作り出す。そういった意味で、本書も一つの文字世界として捉えることができるだろう。東日本大震災から5年たった今、“心”に注目して本書と向き合った時、どのような世界が広がり、何を感じ取ることができるのか。

本と言うのは、奥深い。本自体の面白さはもちろん、読む人によって個性が表れる。書き手と読み手がいて、書き手が意図していることがそのまま読み手に届くとは限らない。むしろ、書き手の想像を超えた世界が、読む人によって作り出されることもある。鳥栖で築かれた「ユートピア」は、読み手にどのように伝わり、理解されるのだろうか。無機質な文字の中に込められた、人間味溢れる“心”を、ぜひ本書で感じてほしい。